
灰色の空

黒崎 由貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の空

【Nコード】

N7573B

【作者名】

黒崎 由貴

【あらすじ】

親と上手くいっていないわけでもない、いじめにあっているわけでもない、その逆でもない。友達がいないわけでもないし、病気でもない。特に何も無い毎日を送っている。それなりに、それなりの人生を生きているマイ。でも、マイにはこの毎日が灰色に見えていた。そして、人には言えない秘密があった。

プロローグ（前書き）

これはダークなお話なので苦手な方は回れ右をして下さい。

ブローグ

誰か私を助けて下さい。

誰でもいい。

教師でも親でも兄弟でも、友達でも。

たった一人でいい。

一人だけでもいいんです。

それだけでも私にはすごくうれしいんです。

目を背けないで。

耳を傾けて下さい。

ほんの少しでいい。

私の話を聞いて下さい。

じゃないと私は自分を保ってられない。

死んでしまいそうになる。

壊れてしまう。

体じゃなくて心が。

心が死んだら、壊れてしまったら私は私でなくなってしまう。

どうすればいいんだろう。

どうすれば私は私自身でいられますか？

お願いします。

どうか私を助けて下さい…

色彩

♪♪

「ん…」

携帯の音で目が覚める。

頭はまだ寝ていたいと言っているが、無理矢理体を起こす。

（6時30分か…）

携帯のアラームを切り、時間を確認すると学校に行くにはまだまだ時間がある。

ゆっくり着替えをして布団を畳むと、のそのそと雨戸を開ける。

いきなり差し込んで来る日光にマイは目をつむる。

どうやら今日は天気がいいらしい。

雲一つない天気。

快晴とは今日の様な天気のことを言うのだろう。

天気記号なら○だ。

（今日も…か……）

マイはそんな事を考えながら雨戸を全部開けてしまう。

マイにはこの空が灰色に見えているのだ。

いや、空だけではない。

目に写る物のほとんどが灰色に見えている。

特に目が悪いわけでもないのに、だ。

医者によると『色彩感覚とかはあるはずだし、精神的なものである』とのこと。

マイの両親はカウンセラーにも病院の精神科にも何度も足を運んだ。

しかし原因はわからなかった。

両親との仲は良好だし、友人関係や学校生活も問題はなかった。

家では物静かなマイだが、先生によると学校では明るく、いじめなどには無縁らしい。

本人も不自由してないらしいので、両親はしばらく様子を見る事になっている。

朝食を食べ、一通り支度をするとか家を出る。

時間は7時30分。

いつもと同じ時間だ。

駅につくといつもの電車とバスに乗る。

ごく普通の生活。

ごく普通の高校生。

ある事を除けば…

「おっはよ〜」

「おはようマイ」

「おはよう」

あいさつをするとみんながあいさつを返してくれる。

マイは容姿はそこそこ、運動と勉強もまあできるぐらいの少女だ。

でも、誰にでも優しいからみんなに好かれている。

だが、それが本当のマイなのかどうか、誰も知らなかった。

「昨日見た？」

「見た見た。すごい面白かった」

昨日のテレビの話や好きな男子の話など、いろんな話をする。

どう見ても普通の高校生なのに…

左手首のリストバンド。

今時の子はよくしている物。

でも、その下には…いくつもの傷跡。

カッターで切った傷。

爪のひっかき傷。

古いものから新しいものまで…

誰かにやられたわけではなく、全て自分でやったものだ。

自分自身を傷付ける行為。

それを人は自傷と呼ぶ。

何故そんなことをするのか？

それはマイ自身にもよくわからなかった。

理由を無理にでもあげるとしたら、血が見たいからとしか言えないだろう。

この灰色の世界の中で血の色だけがはっきりと見える。

他の赤いものはわからない。赤だと認識できない。

すごく不思議だが血の色だけは赤だとわかる。

その時だけは普通の人とあまり変わらない。

マイにとっては自傷は自分という存在を確認するものでもあったから。

自傷をする人は過去になんらかのトラウマをもっている事が多いらしいが、マイはどうだろう。

はっきり言うとマイは過去のことをほとんど覚えてはいない。

だから、よくわからない。

大事な記憶なんてなかったからどこかに捨ててきたのかもしれない。

だが、マイにとってはどうでもよいことだった。そう、自分が今生きている事すらどうでもよかった。

全てに疲れ果ててそんなことなんかどうでもよかった…

ただただ、自分が普通の人とは違うという事を考えていた。

予鈴が鳴っても考えていたのはその事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7573b/>

灰色の空

2010年10月10日02時59分発行